

# 「ありがとう」子ども達



埼玉県

高原光子

鋭い言葉の切っ先が心に突き刺さり、長い間上手にしまい込んでいたはずのマイナスの感情が、その傷口から吹き上げてきた。溜息と共に吐き出される言葉は、「死にたい」というただそれだけだった。

私は先天性の白内障により、ほとんど見ることを知らずに大きくなった。時折顔を出す「見えるよ  
うになりたい」という願望を持って余しながらも、今まで何とか付き合ってきた。たしかに十代の頃には、精神的に不安定になったりしたが、結婚し、子どもを育てる忙しさの中で、心の底から「死」と

というような生命を持った者が憧れてはならない感情に取りつかれるというようなことはなかった。しかし、今の心はその「死」の概念にすっぽりと占領されてしまった。

悲しみを抱えて泣いていたのは、私だけではなかった。もちろん夫や母など悲嘆に暮れている者はいたが、もう一人私と同じように、絶望と罪悪感に苛まれている者がいた。

医師の冷静そのものの言葉が、私の耳元で響いたのは、まだ二カ月にしかならない三男を近くの総合病院の眼科へ連れていったときのことだった。

「残念ですが、お母さんと同じ病気ですね」

子どもの眼の診察を後回しにして、先に母親である私の眼の中を時間を掛けて見た医師が言った。

「あの、どのくらい見えているんでしょうか？」

「はっきり言えませんが、光はわかるようですね。まあ、手術をすれば少しは見えるようになると思いますよ」

医師はそう言うと、大学病院への紹介状を書いてくれた。その紹介状はかすかな希望の手紙には違いない。けれど、そのときの私には、総てが絶望のように感じられ、「死にたい。自分がこの世に生まれて来なければよかったんだ。いや、子どもを生まなければよかった」としか考えられなくなってしまった。

私は今まで、視覚障害というハンディキャップの中で自分を主張して生きてきた。やりたいこととやれることとのギャップで悩み、挑戦とあきらめとのバランスで切り抜けてきた。けれど、親として子どもの障害に向かうことは、これとは全く別のことだった。しかも、その原因を作ったのは親である私だった。私はみすみす子どもを不幸のまっただ中に追い込んでしまったのだ。

父もまたそのことで苦しんでいた。自分と同じ障害を持った娘が生まれたときに、一度は経験したことのある理不尽な感情が再び襲いかかってきた。一人男泣きに泣いても、その悔しさを打ち消すことはできなかつたことだろう。

「死にたい。この子と一緒に死んでしまえば、もうこの障害で苦しむことはなくなるんだ」  
母乳を飲ませながら、私はその感情と戦っていた。うっかりすると、自分の涙が抱いている子どもの耳に流れていった。

けれど、人はそれほど簡単には死ねないものだ。小さな子どもを窒息死させることなどあつと言う間の仕事であろう。けれど、もちろん私にはできなかつたし、やってみることさえしなかつた。

幸い私は独りぼっちではなかつた。行政が派遣してくれているヘルパーであっても、その人はその枠を超えて親身に私の相談相手になってくれた。

生きる気力をすっかりなくしてしまった私は、ヘルパーに励まされ、大学病院へ行った。視力のな

い私にとって、一人で大きな病院に行くことは、とてもやっかいなことだ。たくさんある窓口の中から、自分がかかる科を探したり、検査表を持ってあちこち移動することは、とても困難だ。しかも、どんなに朝早く出掛けても、診察を受けられるのはお昼近くであり、眼圧を計ったり、瞳の中を詳しく検査したりする度に、子どもが大きな声で泣き叫び、その度に順番が後回しにされ、帰りはいつも夕方になった。

手術の日が決まり、入院できることになること、私はまた付き添いのごことで心配し始めた。慣れている家の中ではスムーズに動くことができても、知らない場所で、知り合いの全くいない中で行動することを想像すると、私は怖じ気づかずにはいられなかった。しかし、その心配は杞憂に終わった。この病院は完全看護であり、幼い子供でも例外はないということだった。その意味では、私は幸運に恵まれていた。

けれど、何も知らずに眠っている子どもをベッドの上に残して帰途につくことは、とても辛いことだった。「これで少しでも視力が上がれば、これからずっと一緒にいられるのだから」と何度も繰り返しつつぶやき、自分を納得させなければならなかった。盲学校に入学させることになれば、どうしても小学一年生から寄宿舎に入れなければならないに違いない。そうなれば、休みのときにしか我が子に会えなくなってしまう。それは、親にとっても、子どもにとっても、とても辛いことだ。経験してきた自分が一番よく知っていることだった。何とかして普通学校に入ることができれば——今離れるこ

とが、それを可能にしてくれるのだ。そう思うことによって、自分を慰めていた。

手術の日になった。朝早く病院に到着した私は、ただ黙って待合室に座り続けていた。もし、私に与えられる眼があれば、自分の眼をそっくり子どもにやってしまいたい。いや、私の命と引き替えでも、子どもの眼になるのであればそうしたい。私はそれがどれほど非科学的なことと言われても、手を合わせては神に祈り続けていた。

エレベーターのドアが開き、我が子の寝ているベッドが現われた。

「お母さん。手術はうまくいきましたよ。さあ、一緒にお部屋へ行きましょう」

看護婦はそういって、私の手を取ると、ベッドの枠に触らせてくれた。

「ありがとうございます」

「もう二、三時間したら、目を覚ますと思いますので、そうしたらこのボタンを押してくださいね。心配しなくても大丈夫ですよ。私達が全部やりますから。ただそばにいてくださいいね」

看護婦はそう言うと、部屋を出ていった。涙がひとりで頬を伝って流れた。眠っている子どもの息づかいを聞き、ぎゅっと抱きしめたい衝動を抑えながら、ただじっとしていた。

手術が成功したからといって、それが見えるようになることと結びつかないことは、私がよく知っていた。私も何度かの手術を繰り返し、いつも成功したと言われ、歓喜に打ちふるえながら包帯をはずしてきた。けれど、それはかならず裏切られた。

「お母さん、もう大丈夫ですよ。かなり視力があると思いますよ。後は回復を待つだけです」今日  
はきっとそんな言葉が医師の口から発せられるに違いないと心の中で何度も想像しながら、毎日毎日  
病院に向かった。

いよいよ退院の日になったが、子どもの視力がどうなっているかははっきりわからないということ  
だった。とにかく、たくさんの目薬が渡され、コンタクトレンズが入っていることが告げられただけ  
だった。

そして、その日から本当の意味で視覚障害児を育てることになった。まず、五本の目薬を点眼する  
ことから朝が始まる。指で瞼を持ち上げ、目薬を一滴落とす。右、左、そして、再び右……いやがっ  
て泣き叫ぶ子どもを押さえつけながらの点眼だった。しかも、果たしてその大切な目薬がきちんと眼  
に入っているのが私には確かめることができない。私はただ点眼が成功していると信じることで満  
足した。

週二回の通院もかなりの重労働だった。朝早く出掛けても、帰りは必ず夕方になった。ホームヘル  
パーに手伝ってもらっていても、子どもも親もすっかり疲れ切ってしまった。しかも、通院の度に、眼  
に入っていないければならないはずのコンタクトレンズがなくなっており、その度に新しいレンズが処  
方され、費用負担もかなりになった。点眼のときなど眼を擦ったときに涙と一緒に流れ出していたの

かもしれなかったが、私にはそれを見つげ出す手だてはなかった。

「おかしいな。ちっとも瞳が開かないな」

通院の度に医師が言った。

「ちゃんと目薬差してますか？」

「はい」

確かに点眼の真似事はしていた。けれど、もしきちんと点眼されてないとしたら……それがために視力が上がらないとしたら……私は子どもに何と言って詫びたらよいのだろう。「お母さんは眼が見えなかったからできなかったのよ。ごめんなさい」これで許されるものだろうか。許して欲しいと願ってよいのだろうか……。

しかし、確かめられないからといって他の人に替わってもらうことなど無理な相談だった。ヘルパーの派遣回数は限度だったし、一日五回もの点眼を手伝ってもらえるほどの親しい友人さえそのときの私にはいなかった。入院と手術は何度も繰り返し返され、その度に点眼とコンタクトレンズのことで悩んだ。ときには子どもの寝ているベッドの回りを見てくれる人もいたが、一度としてコンタクトレンズが見つかることはなかった。

母親がそばにいても、声が聞こえないと不安になるのか、子どもはすぐに大きな声で泣いた。電気

をつけるとまぶしがり、消えると恐がった。大きな物音に驚き、静かすぎても不安がって泣いた。私は一日中子どもに話しかけたり、歌ったりして声を出し続け、いつでも母親がそばにいることがわかるようにした。

離乳食が始まると、左手で子どもを抱き、その手で唇を触りながら、右手にスプーンを持って食べさせるようにしたが、眼の見える子どものときとは違い、なかなか上手にならなかった。眼の見える子どものときにも、離乳食を食べさせられずに苦労したが、食べさせる側も、食べる方も見えないので、なかなか口に入らず、いつもそこいら中食べ物だらけになってしまった。しかも、子どもは柔らかな離乳食が嫌いなのか、せっかく口に入れた食べ物を吐き出すことさえした。離乳食を始めたのが入院などで遅かったこともあり、私は思い切って直接ご飯を食べさせてみた。おかずも上の子ども達と同じ幼児食にした。そしてまた、まだ早いとは思ったが、本人にスプーンを持たせて、その手を私が持って食べることを試した。それは思いがけなくうまくゆき、子どもは食べることを楽しみにするようになった。食事の時間になると、自ら手掴みで食べ物を口に運ぶようになった。他人には見せられない光景かもしれないが、私はあえてせっかく本人が知った「食べる楽しみ」を奪わないように好きにさせることにした。

けれど、やはり視力のない子どもの成長は思うに任せないようだった。眼からの刺激が乏しいので、自分からおもちゃを取りに行くこともなかったし、急に手に何かに触れるだけでも恐がって手を引



込めてしまった。なかなか這い這いもできなかったので、オルゴールの入ったボールを転がし、それを追いかけさせたり、一緒に這い這いをしたりしながら、動く楽しみを知ってくれるように願った。また、少し大きくなってからは、自分の足に子どもを立たせ、一緒に歩いて歩き方も教えた。

音に対する興味は幼い頃からあり、いろいろな物を叩いてみたり、変わった声を出して喜んだりしていた。静かに遊んでいるために、家の中でも見つけられなくなることのあった上の子ども達とは違い、いつも声を出しているその子と遊ぶことは、全盲の夫や私にとって楽しいことだった。

一人で歩けるようになると、とても活発になり心配なことも増えてきた。上の子ども達が幼かった頃にも、よく迷子にしては探し回ったが、うっかり手を離そうものなら、すぐそばにいても、お互いを見つけれないこともあった。病院に行ったときなどは、一人でちよこちよこ歩いて行ってしまい、かすかな視力を頼みにして、自分の母親と同じ色の洋服を着た人に飛びついたりするので、子どもに見つけやすいようになるべく色のはっきりした洋服を着るように心がけた。ヘルパーと散歩に出掛けたときには、タンポポや石ころなどに触り、最初は恐がって手を引っ込めたりしたが、興味が出てくると、何でも触りたがるようになっていった。

眼の見えない子どもたちの能力を発達させるために、たくさん経験させたいと思い、できるだけ同じくらいの年齢の子ども達と遊ばせたいとも考えたが、ほとんど視力のない私には、近くの公園に連れていくことすら困難なことだった。幸い兄や姉が通っている保育園に毎朝連れていき、少しの間一

緒に滑り台をしたり、広い部屋の中を走り回ることができた。

だが、兄や姉と同じ年齢になっても、町の保育園に入園させてもらえない見込みはなさそうだった。園長先生などは、できるだけ早急に入園できるように口添えをしてくれたが、行政は首を縦に振らなかった。一歳半の子どもに大便、トイレトレーニングが済んでいないとか、一人で食事ができないなど理由を付けては入園を拒否された。

その頃になると、私をいろいろな人が助けしてくれるようになった。朝保育園で遊んでいても苦情を言われることもなかったし、近くの盲学校の幼稚部の教育相談に週二回通うために、車の運転をしてくれる人もいた。

園長先生の口添えのお陰で、二歳になった時点で保育園に入園できるようになった頃には、すでにずっと前からの園児のように振る舞っていた。毎朝いろいろな草花や、石ころなどに触ったり、砂利の山に上っては、登山気取りで「やっほう」などと大きな声でさけんだりしながら、彼は同じ年の子どもにさほど差を付けられることもなく、大きくなっていった。

いよいよ入学のことを考えなければならぬ時期になると、私は地元の普通学校に入学させるべく教育委員会に対して、話し合いを申し込んだ。それは、話し合いというよりは、地元の普通学校に入学させるという意志表示だった。幸いわずかではあったが視力が残っており、それほど問題なく入学

が許可された。けれど、それは本当にただ入学が認められたということであって、眼の見えない子どもに対する配慮というものは一切ないようだった。

それほど福祉の進んでいるとは思われないこの町では、とにかく入学させることが先決問題だと考えた私は、それに対し特に異議を唱えることはしなかった。

けれど、普通学校で学ぶことはそれほどたやすいことではなかった。一年生の二学期になると、教科書の文字が少しずつ小さくなり、本読みの宿題が出る度に子どもはいやがるようになっていった。泣きべそをかきながら一文字一文字拾い読みをしている子どもの声を聞いていることは、とても辛いとだった。学年が進むに連れ、文字が小さくなれば、授業についていけなくなるかもしれないと判断した私は、社会福祉協議会に相談し、拡大写本の講習会を開いてもらうことにした。そして、その努力が実り、二年生の国語の教科書から以後、家の子どもには本人のもっとも読みやすい形で教科書が提供されるようになっていった。

トラブルもなかったわけではない。プール指導のときの帽子の色についても、危険を未然に防ぐという名目で、家の子どもだけ別の色を使うことになった。それに対し、私は異議は申し立てなかったが、いじめに遭わないように一人だけ帽子の色が違っている理由について、きちんとクラスメートに説明をしてくれるように求めた。また、拡大教科書についても、せっかくの物が無駄にならないよう、この教科書がどれほど必要な物なのかについて、クラス全員に説明するようにした。

しかし、教科書の問題は解決したものの、やはり油断はできなかった。漢字の書き取りを始め、いろいろな場面で他の子ども達についていくことは困難だった。小さなトラブルは毎日のように起きた。ときどきいじめられて泣いて帰ってくることもあった。けれど、私は普通学校で学ぶことが、子どもにとっても、社会にとっても正しいことだと自分にも、回りの人にも言い聞かせるようにして過ごした。

私にはこの他に三人の子どもがいる。四人の子ども達に対し、健常の母親ならしてやれることの大部分を味わわせることなく過ごしてきたような気がする。いい加減な点眼のせいで、子どもの視力回復を妨げてしまったのではないかと危惧している。宿題を見てやったこともなければ、家族で旅行に出掛けたこともない。夏休みなどにつまらなさそうにしている子ども達を見ると、自分のような者に育てられた子ども達が不憫だと思うことすらある。

けれど、私はそれなりに精いっぱい生きてきた。子ども達が楽しく過ごせるようにと、いろいろな団体が主催する催しに参加してきた。お陰で、小さな旅行にも出掛けることができたし、スキーも少しできるようになった。普通学校に入学した子どもをより理解してもらいたいとの一心で、パソコンも始めた。

今私はパソコン通信を通じて、たくさん知り合いとメッセージのやりとりをして楽しんでいる。積

極的に社会参加しているように見える私の陰に、いつも子ども達の姿があった。子ども達のためにと  
思ってきた数多くのことが、結局自分のためだったことを今更のように自覚している。  
私の成長を支えてくれた子ども達に感謝を贈りたい。

「ありがとう」

高 原 光 子  
昭和三十八年生まれ 主婦 埼玉県鶴ヶ島市在  
住

選 評

自分と同じ先天性白内障の障害を子供がもっていることを知ったショック。それが  
父親の代からのものであるという苛酷な状況は、読んでいる方も胸をえぐられる想  
がします。

それでも高原さんは自身が積極的に生き抜いてきたように、子供の教育を工夫し、  
何事にもめげない子に育てようとします。自身もパソコンをはじめ、人との交流の  
世界を拡げようとするなど、この人の細やかな感受性とともに、その生き方に感動し  
ました。

(羽田 澄子)